

平成 23 年 4 月 1 日 (金)
(12:00 現在)日本赤十字社 事業局
救護・福祉部 救護課

東北関東大震災に対する日本赤十字社の対応について (28)

日本赤十字社では、現在、被災地に救護班を派遣するなど、総力をあげて救護活動に取り組んでおります。東北関東大震災における日本赤十字社の対応は以下のとおりです。

1. 救護班の派遣状況 (1日 00:00 現在)

日本赤十字社は、3月11日の発災当日から、全国の救護班及び災害時の救護活動の拠点となる移動仮設診療所 (dERU) チームを被災地各県に派遣しました。医療救護班は、岩手県、宮城県、福島県等で活動を展開しています。

現在までに活動を行った医療救護班は、4月1日現在で総数 **546** 個班となっています (活動準備中の救護班を含む)。

救護班の派遣状況一覧

派遣先	救護班 (dERU 等含む)			
	活動中	活動準備中	活動終了	現在までの活動班総数
北海道内			5	5
岩手県内	11	56	101	168
宮城県内	11	83	169	263
山形県内			2	2
福島県内	5	35	51	91
茨城県内			12	12
栃木県内			2	2
千葉県内			2	2
長野県内			2	2
合計	27	174	346	547

* : ドクターヘリ含む

2. 救護班の派遣場所（1日 00:00 現在）

派遣先	救護班	d E R U
岩手県内	山田陸中海岸青少年の家 山田町立大沢小学校 県立山田高等学校 釜石市立旧第一中学校 陸前高田第一中学校 鈴子広場救護所	山田町立大沢小学校 鈴子広場救護所
宮城県内	石巻赤十字病院 石巻専修大学 蛇田中学校	宮城県庁前 <u>東松島市鳴瀬庁舎</u>
福島県内	河東総合体育館 あづま総合運動公園	

- 宮城県では、これまで 263個班（現在 11 個班が活動中）医療救護班が仙台市と石巻市で活動を行っています。特に甚大な被害となった宮城県石巻市では、市内で唯一医療機能が維持されている石巻赤十字病院に被災者が集中し、「命を支える拠点」として救護活動を続けています。
3月28日には、同病院内に日本赤十字社宮城県支部現地災害対策本部を設置し、宮城県災害対策本部から石巻地域の拠点として、地域の災害医療の調整を行うこととなりました。支部現地災害対策本部には、行政との連携をより円滑にするため、宮城県、石巻市職員も参加しています。
- 岩手県では、これまで 168個班（現在 11 個班が活動中）医療救護班が陸前高田市、山田町、釜石市で活動を行っています。一部の救護所では、体調を崩された被災者の診療対応 24 時間体制で行っております。沿岸地区の避難所を含め、他の団体とも協力関係を保ちつつ、医療活動を続けています。
- 福島県では、これまで 51個班（現在 5 個班）医療救護班が福島市と会津若松市の避難所で活動を行っています。また、福島県支部災害対策本部に日本赤十字社長崎原爆病院から派遣された緊急被爆医療アドバイザーが常駐し、被爆の安全対策に関する情報やアドバイスを受けられる体制を整備しています。また、医療救護班の拠点を中心に避難所等への巡回診療を実施しています。

<救護班>

救護班の1個班は、通常医師1人・看護師3人・運転手1人・事務管理要員1人、計6人からなり、被災地に到着次第、情報を収集し、被災者の救護活動にあたります。

<d E R Uの機能>

d E R Uは大規模災害が発生した時に迅速に被災地域に進出し、救護班の2個班体制で緊急仮設診療所を開設することによって、傷病者の緊急治療を行うとともに、被災した地域の医療機能が復旧するまでの間、地域医療機関の支援を行います。

また、装備されている各種の通信機器を活用して支部災害対策本部や同現地対策本部などとの情報受発信基地としての役割も果たしています。

3. 活動フォト



ヘリコプターで患者を搬送 (3月13日・14日)



石巻赤十字病院 1階が臨時救護所に
(3月13日)



宮城県庁前仮設診療所で冷え込みが厳しい
診療を待っている被災者 (3月14日)



岩手県立高田高校へ巡回診療に向かう救護
班 (3月16日)



釜石市で仮設診療所内で診療を行う救護班
(3月14日)



山田高校で診療中の救護班 (3月14日)



雪が降り積もる石巻赤十字病院 (3月17日)

4. こころのケアの活動状況（1日 12:00 現在）

被災者の精神的ストレスの緩和を図るために、被災地に派遣される救護班には、こころのケア要員を帯同するように努めています。また、石巻赤十字病院においては、こころのケアセンターを設置し、こころのケア班を編成して被災者のご家族への支援など、きめ細かいこころのケア活動を行っています。

こころのケア活動の専従班の活動状況

派遣先	活動中	活動準備中	活動終了	現在までの延べ活動班数
宮城県内	1	1	<u>4</u>	<u>6</u>

<こころのケア班>

こころのケア班は、赤十字のこころのケア要員（看護師等）4～5人・事務管理要員2人、計6～7人からなり、被災地の避難所等で活動にあたります。

<こころのケア>

災害によるストレスを受けたすべての被災者に対して、精神的なダメージ、心身の疲労、避難生活などから生じると考えられるストレス状態の軽減を図るとともに、救護員自身が自らのストレスに対応できるよう支援します。

●活動のひとつま●

「風邪ひいとる子はおらへんか、みんな元気にやっとなるか？」（3月20日）

海側にある岩手県大槌町が壊滅的な被害を受けた金沢地区にある山間の避難所に、神戸から駆けつけた日赤救護班の医師が笑顔で呼びかけると、子どもたちが一斉に振り返った。「関西弁聞いたの初めて」「どっから来たの？」と子どもたちが医師を取り囲む様子を見て、部屋の雰囲気はパツと明るくなったようだ。

「阪神・淡路大震災の時には、自分たちがみんなに支えてもらって本当に心強かったから、今回は自分たちがみんなに恩返しをする時だと思っています。私たちは心にそんな想いを持っていますよ」そう語るのは、被災者のこころのケアを担当している神戸赤十字病院の村上典子医師。

避難所では、被災から1週間が経過。今のところは避難所の中で、掃除や救援物資の分類などの仕事をみんなで役割分担をして、落ち着いた様子で過ごしている方が多いです。しかし、もしも周囲から離れて一人になることが多い方や、同じことを繰り返し話すようになった方がいたら、誰かが話を聞いてあげる—というようなケアが必要です。

被災者の方は自分の体験を第三者に聞いてもらうことで、症状が軽くなることもあります。その時には、決してこちらから被災時の話を聞き出すのではなく、自分から話し出すのを待つことが重要です。周囲の視線を気にしている様子であれば、2人きりになれる環境を作ったりして、落ち着いて話ができるような工夫もしています。



巡回診療をしながら、こころのケアにあたる日赤救護班

5. 救援物資

3月28日現在で、毛布を宮城県内へ82,510枚、福島県内16,020枚、栃木県内15,000枚、山形県内9,000枚、茨城県内3,000枚、合計125,530枚。

また、緊急セットは、宮城県内へ14,676個、岩手県内10,470個、合計25,146個。

安眠セットは、宮城県内へ6,000セット、岩手県内5,000セット、合計11,000セットを搬送し、避難所の必要物資を支援しています。

この他にも岩手県では、避難所で使用するパーテーションを347枚配布しています。また、各企業から食品、医療資機材の提供や生活用品の寄付提供の申し入れがあり、被災地の医療機関等に向けて支援物品の輸送を行っています。

(1) 毛布 (28日8:00現在)

輸送先県別	毛布 (枚)
宮城県内	82,510
福島県内	16,020
茨城県内	3,000
栃木県内	15,000
山形県内	9,000
合計	125,530



(2) 緊急セット (1日12:00現在)

輸送先県別	緊急セット
宮城県内	14,676
岩手県内	10,962
山形県内	504
合計	26,142



※緊急セットは、携帯ラジオ、懐中電灯、三角巾、ブックレットなどのセットです。

(3) 安眠セット (1日12:00現在)

輸送先県別	安眠セット
宮城県内	6,000
岩手県内	5,000
合計	11,000



※安眠セットは、キャンピングマット、枕、アイマスク、耳栓、スリッパ、靴下などのセットです。

●活動のひとこま●

被災者へ送られる救援物資



東京の救護倉庫から搬出される支援物品

緊急セットを配布する赤十字職員

※救援物資は、財団法人 JKA などの助成により整備しています。

6. 国際赤十字の活動

(1) 安否調査

日本赤十字社と赤十字国際委員会(ICRC)は、ご家族やご友人の安否を心配されている方々のために、無料の安否確認サイト「Family Links(ファミリー・リンク)」を公開しています。

URL: www.icrc.org/familylinks

同サイトでは「誰かを探したい場合」と「自分(被災された方)が無事であることを伝えたい場合」の登録ができます。また、被災地の事情に鑑み、英語、日本語のほかにも、韓国語、中国語、ポルトガル語が利用可能となっています。

3月24日現在、5,619件の登録があり、うち1,432件が日本人による登録となっています。

(2) その他活動

13日から17日まで、国際赤十字・赤新月社連盟及び7カ国の赤十字社、赤新月社(アメリカ、オーストラリア、中国、ノルウェー、韓国、トルコ、カナダ)で構成される調査団が順次来日し、日赤職員とともに、被災地でのニーズ調査を行った。また、12日から連盟の広報スタッフ2人が外国メディア対応の支援のために来日しています。

7. 防災ボランティアの活動 (4月1日までの動き)

被災地で活動するボランティアの拠点とするため、新潟県のボランティアリーダーを宮城県支部に派遣し、3月14日には、同支部内にボランティアセンターを設立しました。宮城県は16日から、岩手県、福島県、茨城県では、一般のボランティアを受け入れるための活動を開始しています。

	設立日	活動状況
本社ボランティアセンター	3月15日	各県支部ボランティアセンターの運営支援
岩手県支部ボランティアセンター	3月11日	赤十字ボランティア受入れのための準備中
宮城県支部ボランティアセンター	3月14日	
福島県支部ボランティアセンター	3月15日	
茨城県支部ボランティアセンター	3月14日	赤十字ボランティア受付中

●活動のひとこま1●

要請から1日で物資到着 ～赤十字飛行隊岡山支隊が岩手へ空輸～ (3月19日)

東北関東大震災で大津波に襲われた岩手県陸前高田市で活動する日本赤十字社岡山県支部救護班に3月19日、赤十字飛行隊岡山支隊が小型プロペラ機で医薬品などを空輸。現地からの補給依頼に1日で応えました。

緊急輸送が実現した背景には、現地にいる救護班と岡山県支部との密な連絡調整がありました。支部から空輸可能という連絡が入ると、救護班は現地のニーズを調査。陸前高田市健康推進課の協力のもと、不足物資をリストアップしました。輸送された物資は、注射器や薬などの医薬品のほか、タオルやマスクといった日用品に及びます。

24日には、衛生用品やボランティアが使用するヘルメット等を積んだ第2便も飛び立ちました。



●活動のひとこま2●

温かい食べ物、被災後初めて ～山形県支部らが仙台市で炊き出し支援～ (3月18日)

日本赤十字社山形県支部や県内の奉仕団などが主体となって3月18日、鶴巻児童館（仙台市立鶴巻小学校敷地内）で、東北関東大震災で被災した方たちに炊き出しを行いました。

配付対象が鶴巻小学校に避難している方だけに限定しないよう、炊き出し前には宣伝を実施。近隣からも住民が次々に訪れ、200人を超える規模になりました。

すいとん600食にごはん110キロ、ロールパン400個、お茶1,000本などが次々に配られ、なかには自宅から出られない高齢の家族のためにすいとんを鍋で持ち帰る方も。受け取った方からは、「被災してから初めて温かい食べ物が食べられました」との声が聞かれました。



8. 献血・血液製剤の供給

3月30日現在、岩手県、宮城県、福島県では、献血者の受け入れを休止していますが、血液製剤の病院への供給については、他の地域の血液センターの協力により、支障は生じていません。

全国的に献血協力者の増加が続いており、当面は血液の在庫に余裕があるため、日本赤十字社ではホームページ等で長期的なご協力をお願いしています。

9. 義援金の受付

日本赤十字社は、被災された方々への見舞金である災害義援金の受付を行っています。

受付けた義援金は、第三者機関である義援金配分委員会（被災自治体、日本赤十字社、報道機関等で構成）に拠出され被災者に配分されます。今回の義援金については、各県の被災者に対して迅速に行き届くよう、関係機関と協議しています。

(1) 義援金受付状況

東北関東大震災義援金へ多くの皆さまから温かいお気持ちをお寄せ頂きありがとうございます。現在の義援金受付状況をご報告いたします。

3月29日（火）現在：112万8,434件 594億2,128万4,898円



※この数字はゆうちょ銀行（～3月24日）、三井住友銀行、三菱東京UFJ銀行（～3月22日）の義援金口座へ入金を確認された金額及び日本赤十字社本社へ持参いただきました義援金（～3月25日）の合計額です。

写真：日赤本社に義援金を持ってきてくれた高橋直幹くんと和志くん

(2) 義援金の受付

金融機関： 郵便振替（郵便局）

口座番号： 00140-8-507

加入者名： 日本赤十字社 東北関東大震災義援金

取扱期間： 平成23年3月14日（月）～平成23年9月30日（金）

※郵便局窓口での取り扱いの場合、振替手数料は免除されます。